

**つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み**

猪谷千香著（ちくま新書・819円）

毎日新聞 2014年2月9日

（青太字は引用者によります。）

公共図書館は、書店で有料で売られている本を無料で誰にでも貸してしまう。全国に約3200館もあって、多くの人が当たり前のように利用しているのだが、よく考えてみると、少し変わった公共施設だ。

その図書館が変わりつつある。単に本を貸すだけでなく、「課題解決」「ビジネス支援」を掲げ、そのための知識や関係機関とのネットワークを持った人材を配置する。地元特産品の普及のために、レシピと調理器具を貸し出したケースもある。

一方で、財政難のあおりを受けて、どこの図書館も厳しい運営事情を抱えている。神奈川県では、県立図書館の存続の方向性が定まらず、「なぜ県が図書館を持つ必要があるのか」という議論が続いている。

本書は、元新聞記者がこの10年間に起きた変化を取材したものだ。本の貸し借りは人のつながりを生む。関係者の知恵と愛情があれば、**図書館がコミュニティの新たな核となる**可能性がある、と著者は説く。

民間企業が参画した運営形態や市長の発言から、何かと注目される佐賀県の武雄市図書館についても、そこで働く職員らの声が紹介されており、議論の助けになる。 （直）